

佳作

「ぼくのお母さん」

ぼくのお母さんが、おこるときは桃太ろうに出てくる鬼でもこわがるくらいおそろしい。だけどぼくがいい子でいると、お母さんはニコニコだ。いつもニコニコでいてほしいけど、いつもぼくがいい子でいるのは大変だ。

ぼくのお母さんは料理が上手だ。ぼくはお母さんの料理ならなんでもおいしい。夏休みのお昼ごはんは、そのうめんばかりだ。だけど、やくみがしょうがになったり、わさびになったりする。いつも同じそうめんだと思うけど、「なっ、おいしいやろ。」といわれるとそうかなあ、と思えてくるからふしぎだ。

ぼくのお母さんはおもしろい。ひとつめはいつもおもしろいことをいってぼくをわらわせてくれる。だけどちよっと下品だなあと思うときもある。ふたつめはおもしろいことを、むいしきでやる。前はスリッパを種類がちがうのをはいていた。きのうは、ゴキブリホイホイをふん

愛知県

江南市立門弟山小学校 四年

波多野 希陽

づけておかあさんがゴキブリホイホイにひっかかっていた。ぼくは「あーあ」とためいきをつく。

ぼくのお母さんはラジオをやっている。たくさんのリナーさんがお母さんのラジオ番組にメールをおくってくれる。聞いているだけでおこっている人も笑えてくるまほうのラジオだ。それはぼくのじまんだ。

ぼくのお母さんは、いいことをいう。たまに。ほんのたまにだけ。ぼくがこの作文をかいている時だつて「文字数じゃないやろ。ありがとうの気持ち伝わるように書けばいいよ。」といった。お母さんに書いているのに。

ぼくのお母さんはすごく強い。一回も病気にかかったことがない。それ以外でも強いけど。ぼくもそんな強い人になりたい。

ぼくはそんなお母さんが好きだ。お母さんいつもありがとう。